

リトミック・オンライン・ジャーナル

『音楽と動き』

第3巻第2号通巻5号

Eurhythmics Online Journal “Music and Movement”

Vol.5

もくじ

【論文】

リトミック研究センター創設者、岩崎光弘の音楽教育観と実践

— 『リトミック・バイエル』、『リトミック 105』の分析を中心に—

板野 和彦・板野 晴子・・・P.1

【エッセイ】

リトミックと国際交流

池谷 幸・・・P.11

## 【論文】

### リトミック研究センター創設者、岩崎光弘の音楽教育観と実践

— 『リトミック・バイエル』、『リトミック 105』の分析を中心に—

板野和彦（明星大学教授・リトミック研究センター特別顧問）・板野晴子（立正大学教授）

The View of Music Education and Practice of Mitsuhiro Iwasaki, Founder of the

Rhythmic Research Center

Focusing on the analysis of "Eurhythmics Bayer" and "Eurhythmics 105."

Kazuhiko ITANO, Seiko ITANO

Mitsuhiro IWASAKI (1944-2019) was a music educator who worked as an instructor and textbook author at the music school of Victor Company of Japan and later founded the nonprofit Rhythmic Research Center to research and promote rhythmic education. This paper examines "Eurhythmic Bayer" by Iwasaki and Tamura-Mabuchi and "Eurhythmic 105" by Iwasaki to show that Iwasaki sought to elevate music education from the mere acquisition of performance skills to "education of emotions and senses" through the use of rhythmic education.

Key Word: Mitsuhiro IWASAKI, Dalcroze-Eurhythmics, Rhythmic Research Center

はじめに

岩崎光弘（1944-2019）は日本ビクター株式会社の音楽教室で指導担当者・教科書執筆者として活動し、後に非営利活動法人リトミック研究センターを設立し、リトミック教育の研究、普及にあたった音楽教育家である。本稿では岩崎・田村（馬淵）による『リトミック・バイエル』と岩崎による『リトミック 105』を検討することにより、岩崎がリトミック教育の活用によって、音楽教育を、単なる演奏技術の習得から「情操と感覚の教育」へと高めようとしたことを明らかにする。

岩崎光弘の教育観、教育実践を扱った先行研究は管見の限り見当たらない。没後まだそれ程の期間が経過していないためと思われる。先行研究が無いため、本稿では本人の残した著作、関係者からの聴き取り等を中心に研究を進めてゆく。関係者の高齢化が進んでいるため、年月の確定や岩崎の研究内容・業務内容の確認などは、可及的速やかに行う必要がある。

#### 1. 岩崎の経歴と業績について

岩崎光弘（1944-2019）は、1944年1月19日、東京都中央区日本橋浜町にて誕生し、1950

年、千葉県市川市立中山小学校へ入学、1956年、千葉県市川市立第四中学校へ入学、そして1959年、千葉県立国府台高等学校へ入学した。高等学校卒業後、1962年、東京芝浦電気株式会社へ入社したが、1963年からは音楽の道へ進みたいと、音楽大学入学を目指して、当時、国立音楽大学の教員であった岡本仁に師事した。

1964年、国立音楽大学音楽学部教育音楽学科第Ⅱ類へ入学し、そこで板野平に師事した。これがリトミック教育との出会いであった。1968年、国立音楽大学を卒業し、日本ビクター株式会社音楽事業部へ嘱託入社した。日本ビクター株式会社ではビクター音楽教室に所属し、音楽教室のオルガン科とピアノ科の講師の指導にあたり、教科書等も執筆した。

1970年には、千葉県市川市内の自宅にリトミック音楽学院を設立し、地域の子どもの指導にあたった。1982年には横浜さくら幼稚園の園長に就任（21年間）した。1988年にはリトミック研究センターを創設（2001年、NPO法人格を取得）し、会長としてリトミックの研究、教育にあたった。2019年7月10日、聖路加国際病院（東京都中央区）にて逝去（享年76歳）した。

## 2. 日本のリトミック導入史における岩崎の位置づけ

昨今の我が国では、様々な幼児教育向けの音楽表現活動がリトミックと称されて実践される状況となっている。それらを見る限り、リトミックの実践の現場でもリトミックの捉え方に齟齬が生じつつあることがわかる。それだけに一層、今こそ、リトミックを現代の日本に広めようと考えた岩崎の研究は必須と考える。

日本へのリトミック導入史を振り返れば、古くはリトミックの身体運動の方法に着目した演劇人、歌舞伎役者、舞踊家らによるものである。演劇改革運動に取り組んだ市川左団次（1880 - 1940）と小山内薫（1881 - 1928）、音楽家の山田耕作（1886 - 1965）、舞踊家の石井獏（1886 - 1962）、伊藤道郎（1893 - 1961）や岩村和夫（1902 - 1932）、芸術家の斎藤佳三（1887 - 1955）らである。彼らによるリトミック導入は、リトミックの方法をそれぞれの専門分野に活用するというものであった。

その後、新渡戸稲造（1862-1933）、阿部重孝（1890-1939）、天野蝶（1891-1979）、小林宗作（1893-1963）、板野平（1928-2009）等、教育分野にリトミックを紹介した彼らの業績は岩崎によって受け継がれ、今日に至っている。岩崎とリトミックとの縁は、国立音楽大学音楽学部教育音楽学科第Ⅱ類においてリトミックを学んだことに始まる。板野平が岩崎のリトミック観に大きな影響を及ぼしたことは自明である。岩崎は自著（岩崎、1993：151-152）において日本のリトミックの導入史についても言及している。そこには記されていないが、日本のリトミックの導入史上に岩崎を語る上で特筆すべきは、早稲田大学10代目の総長であった村井資長（1909 - 2006）との出会いである。村井は千葉県市川市に居を構え、妻の禎子の恩師・河井道（1877 - 1953）の指導の下、キリスト教伝道所と日曜学校を始め、1949（昭和24）年に幼稚園を開設した。後に村井は妻の禎子が園長を務める「村井幼稚園」での教育内容にリトミックを採用することとし、岩崎をリトミックの講師として招聘したのである。

岩崎によると村井にリトミックを説いたのは新渡戸稲造であり、村井は新渡戸から「コップと水の話<sup>1</sup>」に例えてリトミックを説明されたのだという（板野、2015:30）。新渡戸は教育界にも非常に交流の幅が広い人物である。『学校と社会：三つの講義』（The School and Society: Being Three Lectures、1899）の著者、教育学者のJ.デューイとも親交が厚い。新渡戸は1900（明治33）年にはアメリカで「Bushido—the soul of Japan」を発表し、1911（明治44）年には「修養」を出版するなど<sup>2</sup>、一貫して人格の修行について論じていた。その後、新渡戸は1920（大正9）年から1926（大正15）年までスイスのジュネーヴにおいて国際連盟事務次長の任にあっている。その当時、孫の新渡戸誠（当時7才）と加藤武子（当時5才）らはJ=ダルクローズから直接リトミックを学んでいる。京都大学教授、東京帝国大学農科教授・第一高等学校校長、東京女子大学の初代学長であった新渡戸と、工学を専門とし草炭研究で北海道に縁が深く、キリスト者であり、早稲田大学名誉教授、日本カナダ教育文化交流財団理事長、早稲田大学第10代総長、早稲田奉仕園第6代理事長、恵泉女学園大学初代学長であった村井の両者との間において、共通の話題も多かったと推察できる。1910年前後から「新教育」と呼ばれる学校教育改革運動が展開されており（佐藤、1996:8）、その流れを如実に感じ取っていた新渡戸と村井の両者間では、リトミックが子どもの「人格形成に寄与する教育法」として認識されていたといえる。

### 3. リトミックとの出会い

岩崎は1964年に、国立音楽大学音楽学部教育音楽学科第Ⅱ類へ入学し、板野平の指導を受けた。当時の状況について、岩崎は次のように述べている。

リトミックが本来の音楽学習のメソッドとして実践されたのは、1956年です。アメリカ、ニューヨークのダルクローズ音楽学校を卒業し、日本人で初めてリトミックのライセンスを取得して帰国した板野平が小林宗作とともに国立音楽大学の中にリトミックを取り入れたのです。その後板野平は有馬大五郎（元・国立音楽大学学長）の熱い支持を受け、1962年に国立音楽大学教育音楽学科第Ⅱ類としてリトミックを専門的に教える科を設立したのです。1959年、氏の執筆した『音楽反応の指導法』（国立音楽大学出版）は30年後の今日でもリトミックのバイブルとして多くのリトミック指導者によって購読されています。（岩崎 2012:153）

我が国で初めて大学に設定された専門の課程でリトミックを学ぶことができる、という当時

---

<sup>1</sup> リトミック研究センターのHP <https://www.eurhythmics.or.jp/search/>

には、岩崎が話していた「幼児期に大切なのは、小さなコップにたくさんの水を注ぐよりも、将来に備えてコップを大きくすることです」という文章が掲載されている。

<sup>2</sup> 新渡戸稲造『修養』（1911）国会図書館復刻版

の岩崎の捉え方が了解される。上記の『音楽反応の指導法』はリズム運動の授業で使用され、併せて、ソルフェージュの授業では『ダルクローズ・ソルフェージュ1～3巻』が、即興演奏を学ぶキーボード・ハーモニーの授業ではジョージ・ウエッジの『KEYBOARD HARMONY キーボード・ハーモニー』が使用された。いずれも板野平の執筆あるいは翻訳によるものだった。また、ジャック＝ダルクローズの教育学的著作である『リズムと音楽と教育』も板野によって翻訳され、岩崎はこれを熟読したと後に語っている。

#### 4. 音楽反応の指導法について

『音楽反応の指導法』は、1959年に板野平によって著された「文部省昭和33年度中学校音楽実験研究報告書」である。先述の通り岩崎は本書を熱心に学び、多くを吸収した。本稿では岩崎の著作と『音楽反応の指導法』の内容との比較・対照を行う。以下に『音楽反応の指導法』の教育内容を記す。

##### 1 リズム運動の導入

生徒の自然リズム 各生徒のもつテンポの発見 生徒の標準テンポ発見の方法 生徒のもつ自然運動

##### 2 自然運動の指導

I 歩行 II かけ足 III ジャンプ IV スプリング V スキップ

##### 3 即時反応訓練

##### 4 音楽の強弱 (Dynamic)、速さ (Tempo) と空間 (Space)

テンポ、ダイナミックと空間と身体運動

テンポの漸次的変化

##### 5 アクセントと拍子 アクセントと身体運動との関係

##### 6 基礎リズムの指導

##### 7 リズム・パターンの指導

I 4分の2拍子 II 4分の2拍子の歌からのリズム・パターン指導 III 日常生活からの特徴ある動作を引用して短いリズム・パターンの指導を行う。 IV 労作リズム V 名前のリズム VI 特殊リズムの指導 VII 4分の4拍子 VIII 4分の4拍子の歌からのリズム・パターン指導 IX 4分の3拍子

##### 8 指揮、フレージング

##### 9 複合リズム

##### 10 リズム・カノンの指導

##### 11 8分の6拍子の指導

I 8分の6拍子の基礎リズムの指導 II 8分の6拍子のリズム・パターン III 8分の6拍子の複合リズム IV 8分の6拍子のリズム・カノン V さらに複雑な8分の6拍子のリズム・パターン VI 4分の3拍子の歌を8分の6拍子で指揮する練習

##### 12 シンコペーションの指揮

### 13 2対3と3対2のリズム指導

I 8分音符と3連音符による2対3と3対2のリズム II 2対3のリズム(4分の3拍子) III  
3対2のリズム(8分の6拍子)

・ソルフェージュ

1 音の聴・唱(音の反復)の練習 2 全音と半音の練習 3 音階指導 4 旋律指導 5 音  
程指導 6 和音指導(板野 1973:目次)

## 5. リトミック・バイエルについて

こどものバイエル、新しいシステムによるリトミック・バイエル〈上・中・下〉は1973年に田村明彦との共著で、ビクター音楽教室より出版された。『こどものバイエル 新しいシステムによるリトミック・バイエル』の基本的なアイディアは、サブタイトルにあるようにバイエル・ピアノ教本の学習にリトミックの方法を取り入れるということである。そしてその特徴は①弾く前に歌うことを重視する、②上巻冒頭の1番から8番はバイエルのオリジナルの曲ではなく、シンプルな旋律に歌詞や階名が付された曲が設定されている、③上巻、中巻、下巻のそれぞれの冒頭に「指導上の注意」が示されている、④バイエルの練習曲の間に、歌うことを促すために子どもの歌が挿入されている。

上巻の1番から8番はバイエルのオリジナルな曲の代わりに、著者らによるとと思われるオリジナルな旋律に歌詞や階名が付された曲が配されており、ここでソルフェージュの基礎的な部分を学ぶことができるよう工夫されている。そして上巻の指導上の注意「1. 新しい音が出て来る時に」では子どもたちと1番から8番までの歌を歌い、先生と一緒にピアノで弾いた後に楽譜を見せるという指導上の手順が示されている。ピアノの演奏を学ぶ際に、簡単な歌やわらべ歌等と結びつける発想はゾルタン・コダーイ(Kodály Zoltán 1882-1967)のメソッドで採用されているし、ピアノ教本ではジョン・トンプソン(1889-1963)のトンプソンピアノ教本でも用いられている。

上巻の指導上の注意「2. 曲をひかせる前に十分な準備を、引き出したら終わりまで。」では、子どもが一旦演奏を始めたなら、終わりまで止まることなく、スムーズに演奏できるように配慮することが大切だとして以下の6項目が示されている。

- A. 楽譜を指さしながら、リズム唱させる。
- B. リズム動作をしながら、楽譜を目でおえるようにする。
- C. 右手で弾くところは右手、左の部分は左でリズム動作をさせる。リズム唱もする。
- D. ハンドサインをつけて階名でうたう。
- E. 先生：リズム唱、生徒：ハンドサインをつけて階名で同時にする、この反対もする。
- F. 歌いながらピアノでひく。(岩崎、田村 1973:4)

以上の様な練習を、子どもたちが教師とともに行うことによって、演奏の際の困難さを軽減

し、スムーズに演奏することができるようになることを目指している。これは、教師が新しい曲を指導する際に、説明だけ行い「それでは、来週までに練習してきてください。」と子どもに丸投げし、家庭での練習が負担になる、という状況を避けることができるものであるとも考えられる。

そして、その音楽的な意味について「このことは大変重要なことです。はじめから終わりまで正しいテンポやフレーズでひかない限り、その音楽はこわれてしまいます。」(岩崎、田村 1973:4) と述べられている。これは音楽教育を技術的指導ではなく、身体運動を活用して、簡単に、かつリズムを重視した方法で開始したジャック＝ダルクローズの発想と通ずるところがある。

中巻の「指導上の注意」は、1. リズム打ち、2. 視唱、3. 聴音、4. 創作、という4項目に分けて述べられている。

「1. リズム打ち」では、子どもたちに拍をステップさせながら、同時にリズムを手で打たせる方法が示されている。ジャック＝ダルクローズは「正しい歩調は、時間を自然に均等分割するものであり、いわゆる小節のモデルである。」(ジャック＝ダルクローズ 2003:37) として拍と小節、そして歩行の関係を明らかにしている。そして、この項で特に注目すべき記述としてはリズムカノンについて言及されている点を挙げるることができる。リズムカノンは以下の譜例の様に、先生がリズムを打ち、1小節遅れで生徒がこれを繰り返す練習である。

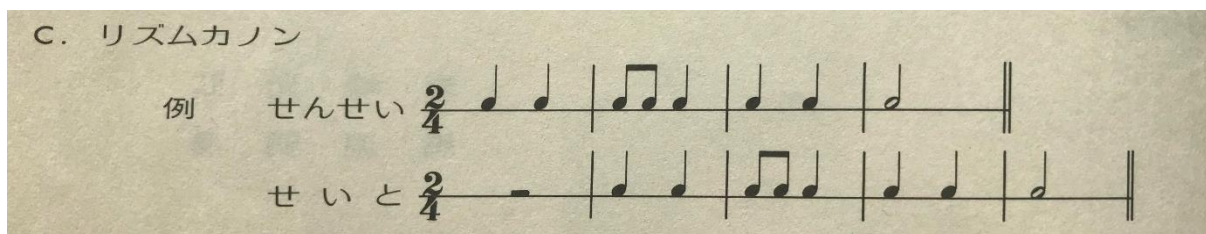


図1：C. リズムカノン

リズムカノンは「すべては即興で演奏を継続されるため、生徒の心の集中と機敏な反応が要求される」(板野 1973:99) 練習であるとされる。

続く「2. 視唱」では、読譜をする際に、先ずリズム打ちを行い、リズムを十分に理解、演奏できるようになった後に階名で歌うことを勧めている。また、心唱、つまり音の高さや長さを心の中で思い浮かべる練習も取り入れられており、ジャック＝ダルクローズからの影響が見て取れる。「3. 聴音」は「A. 模倣」と「B. うたう、書く」、に分けて練習を行うことが勧められている。これは、著者らがピアノ教育においていきなり弾くことが望ましくない、と考えたことの表れであるが、ジャック＝ダルクローズは次のように述べている。

しかるに、素朴で無邪気なお母さんときたら、音楽性を磨くにはただただピアノの練習あるのみと信じ込まされているのである。これは大間違いだ。ピアノの練習は、それに

先立って耳と動きの教育をしておかないと、たいていの場合、聴取能力とリズム能力を損なう。」(ジャック＝ダルクローズ 2003:64)

この部分で、ジャック＝ダルクローズはピアノのレッスンをを行う前に、ソルフェージュとリズム運動の学習を行うことを勧めているが、筆者らは本書がピアノ教本であることからして並行して行うことを提案したと思われる。「4. 創作」において筆者らは「A. メロディーをひく」、「B. 伴奏をつける」、という2つの内容を示しているが、この創作の部分は、もともとバイエルには含まれていない部分であり、子どもたちの音楽的能力を伸ばしてゆくために必要不可欠な部分であると考えられる。また、筆者らは国立音楽大学で板野平教授のキーボード・ハーモニーの授業を受けており、その学びが本項目の背景にあるものと思われる。

下巻の「指導上の注意」は1. リズム打ち、2. 視唱、3. 聴音、4. 創作であり、中巻と項目は同様である。ただ、各項目に、より高度な内容が盛り込まれている。

## 6. 『リトミック 105』について

『リトミック 105』は1979年にビクター株式会社より出版され、後にリトミック研究センターより再度発行された、リトミック教本である。この教本の目指す教育について岩崎は「音楽教育の真のねらいは「情緒」・・・美しいもの、知的な物、崇高なもの・・・を見たり聞いたりして、素直に感動する“豊かな心”の動きを、そしてそれらを感じ、受け止めることのできる「感覚」(集中力、選択力、判断力、創造・想像性、自主性、思考力、反応力など)を高めること、つまり情操と感覚の教育だと思えます。」としている。(岩崎 1979:120)冒頭に板野平による推薦のことばが記され、あとがきでは、板野から指導法を学んだことが岩崎自身により述べられている(岩崎 1979:120)。

本書では、指導内容がAからJまでの10項目に分けられている。「A基礎リズムと即時反応」、「B数・拍の把握」、「Cダイナミック」、「D拍子」、「E物語によるリズム反応」、「Fリズム・パターン」、「Gソルフェージュ」、「H教具を使ったリズム指導」、「I先生のためのキーボード・ハーモニー」、「Jリズム運動のために、色々な歌」、である。そして、これらの項目を、それぞれ第一段階から第三段階の3つに分けて指導するように設定されている。実際のレッスンにあたっては、教師自身が、このAからHまでの項目に該当する指導内容を選んで学習の流れを作ることになる。その選択の仕方について「毎回違う方法でするよりも、子供達がそのことを十分おぼえてしまう位、繰り返すとよいでしょう。」(岩崎 1979:3)というアドバイスが記されている。

以下、『リトミック 105』の指導項目と、『音楽反応の指導法』の指導項目を対比してゆく(表1を参照)。該当項目なしについて解説するならば、「0-1. 合図は1拍前」、は指導上のアドバイスであり、該当の項目は見当たらない。「0-2. リズム唱・リズム動作」は四分音符、八分音符、二分音符等に固有のシラブルを付して行う練習である。ガラン・パリ・シュベラの実践に見られる方法であるが、音楽反応の指導法では示されていない。その他、該当する項目が



見当たらなかったのは、「7. G dur の練習」、「8. F dur の練習」、「9. a moll の練習」、「10. 副三和音」、「11. 借用和音」の5項目である。これらは「I 先生のためのキーボード・ハーモニー」として挙げられているもので、子どもたちに対する指導を記した『音楽反応の指導法』には見当たらない。同書ではハ長調の主要三和音を歌唱や身体運動を通して学ぶところまでである。なお、板野平が1975年に出版した『リトミック・プレイルーム』にはハ長調、ト長調、ヘ長調で行う練習が掲載されており、岩崎がこちらを参考にした可能性はある（板野平1975:168-207）。

表1に示した通り、『リトミック105』に示された項目はほとんど全て『音楽反応の指導法』に見られるものであり、影響関係は明らかである。ただ、もともと後者は中学校における音楽の授業を前提として書かれているが、前者は、ピアノ教師による幼児に対する指導を前提としており、相違があるのは当然である。

リトミックを創案したジャック＝ダルクローズは自分の音楽とそれに関連した指導法を示したうえで、「言うまでもないことだが教師はこれらをそのまま用いることはないだろう。(中略)教師は同じ種類で、『生徒たちの能力の程度に合った練習』を自分自身で探さなくてはならないだろう。」(Jaques-Dalcroze 1917:37)としており、教師がみずからレッスンの内容を構成することを勧めている。『リトミック105』のあり方も、このような考え方に貫かれているものと考えられる。

## 8. 考察

岩崎の初期の著作である『リトミック・バイエル』と『リトミック105』の検討を通して、彼がピアノを学ぶ子どもたちとその指導にあたる音楽教室の講師たちの教育に、情熱を傾ける姿が浮かび上がってきた。岩崎は板野平より伝えられたジャック＝ダルクローズの教育観を学び、リトミックの方法を活用して、当時の音楽教育を改革しようとした。当時のピアノ学習では、先生が曲についての説明をし、生徒は自宅へ戻り、一人で繰り返し練習をすることを義務付けられていた。この様な学習方法では、子どもは不明な点等があっても質問もできず、弾こうとする曲の音に触れる機会が少ないため、学習は困難なものとなる。そこで岩崎はソルフェージュとリズム運動を指導に取り入れることによって、子どもたちの理解を促し、音のイメージを持たせる努力をしたのである。

(表1) リトミック105と音楽反応の指導法の指導項目の対応一覧

リトミック105	音楽反応の指導法	
区分	指導項目	
	(0-1, 0-2 は、指導前によくお読みください。)	
A 基礎 リズム と即 時反 応	0 1. 合図は1拍前	該当項目なし
	2. リズム唱・リズム動作	該当項目なし
	1. ドン すわれ	3-5 アクセントと拍子
	2. あたま・はな・みみ	3-3 即時反応訓練
	3. ホールのように	3-2 自然運動の指導 IIIジャンプ
	4. 王様とカンムリ	3-6 基礎リズムの指導
	5. あふない止まれ	3-6 基礎リズムの指導
	6. 大工さん(その1)	3-6 基礎リズムの指導
	7. ぞうさんとりすさんのおさんぽ	3-6 基礎リズムの指導
	8. 超特急ひかり号	3-6 基礎リズムの指導
	9. こんにちわ	3-6 基礎リズムの指導
	10. 赤信号	3-3 即時反応訓練
	11. 反対まわり	3-3 即時反応訓練
	12. ぎったんぱっこ	3-6 基礎リズムの指導
	13. だれのうちかな	3-6 基礎リズムの指導
	14. 女の子と男の子	3-6 基礎リズムの指導、4-1 音の聴・唱(音の反復)の練習
	15. おまじまじよう	3-6 基礎リズムの指導
	16. じゃんけんぼん	3-7 リズム・パターンの指導
	17. みつばちさん	3-6 基礎リズムの指導
	18. まねっこポーズ(その1)	3-10 リズム・カノンの指導
	19. 汽車とトンネル	3-6 基礎リズムの指導
	20. イマジネーション(その1)	3-6 基礎リズムの指導
	21. お散歩しましょう	3-9 複合リズム
	22. みんなで作るいろいろなかたち	3-6 基礎リズムの指導、アクセントと拍子
	23. ヒョーキになって飛びましょう	3-7 リズム・パターンの指導 VI 特殊リズムの指導
24. オスディナーリズム	3-9 複合リズム	
25. おめかしさん	3-3 即時反応訓練	
B 振 数・ 拍 の	1. ロボットさん	該当項目なし(数・拍の把握)
	2. おともだちのなまえ(その1)	3-7 リズム・パターンの指導V名前のリズム
	3. おともだちのなまえ(その2)	3-7 リズム・パターンの指導V名前のリズム
	4. 止まって拍手・止まってポーズ	3-8 指揮・フレージング
	5. ジャックとまめの木	3-4 音楽の強弱(Dynamic)、速さ(Tempo)、空間(Space)
	6. おかき(その1)	3-4 音楽の強弱(Dynamic)、速さ(Tempo)、空間(Space)
C ミ タ イ ナ	1. おおまくなーれちいさくなーれ(その1)	3-4 音楽の強弱(Dynamic)、速さ(Tempo)、空間(Space)
	2. おおまくなーれちいさくなーれ(その2)	3-4 音楽の強弱(Dynamic)、速さ(Tempo)、空間(Space)
	3. たかさがし	3-4 音楽の強弱(Dynamic)、速さ(Tempo)、空間(Space)
	4. ばんとまじむ	3-2 自然運動の指導 IVスプリング
	5. みずたまり	3-2 自然運動の指導 IVスプリング
D 拍 子	1. 大工さん(その2)	3-5 アクセントと拍子
	2. 2つ3つ4つ(その1)	3-5 アクセントと拍子
	3. 2つ3つ4つ(その2)	3-5 アクセントと拍子
	4. ちいさなおうち おおきなおうち	3-5 アクセントと拍子
	5. かたたたき	3-5 アクセントと拍子
	6. もちつき	3-5 アクセントと拍子
	7. 2つ3つ4つ(その3)	3-5 アクセントと拍子
	8. 指揮をしながらかきましょう	3-8 指揮・フレージング
E リ ズ ム 反 応 に よ る	1. かみなりさん	3-7 リズム・パターンの指導 IV労作リズム
	2. まほうつかい	3-5 アクセントと拍子
	3. えんそく	3-6 基礎リズムの指導
	4. おかいもの	3-7 リズム・パターンの指導V名前のリズム
	5. ちょうちよう	3-5 アクセントと拍子
	6. さあおきましょう	3-7 リズム・パターンの指導
	7. いんであんのおどり	3-7 リズム・パターンの指導
F リ ズ ム パ タ ー ン	1. おかき(その2)	3-4 音楽の強弱(Dynamic)、速さ(Tempo)、空間(Space)
	2. まねっこポーズ(その2)	3-7 リズム・パターンの指導
	3. おにごっこ	3-7 リズム・パターンの指導
	4. じゃんけんぼん	3-7 リズム・パターンの指導
	5. じゅんばんリズム	3-5 アクセントと拍子
	6. ことばのリズム	3-7 リズム・パターンの指導V名前のリズム
	7. みち	3-8 指揮・フレージング
	8. あーした天気になーれ	3-7 リズム・パターンの指導
	9. ごあいさつ	3-7 リズム・パターンの指導、3-8 指揮・フレージング
	10. 2人いっしょ	3-3 即時反応訓練
	11. イマジネーション(その2)	3-7 リズム・パターンの指導
	12. カノン(まねっこリズム)(その1)	3-10 リズム・カノンの指導
	13. カノン(まねっこリズム)(その2)	3-10 リズム・カノンの指導
G ソ ル フ エ ー ジ ュ	1. ハンドサイン	4-3 音階指導
	2. たかい木とひくい木	4-3 音階指導
	3. おんかいを歩きましょう	4-3 音階指導
	4. 心の中でうたいましょう	4-3 音階指導(心の中で音階をたどってゆく)
	5. まねっこメロデー	4-1 音の聴・唱(音の反復)の練習
	6. どのメロデーかな	4-1 音の聴・唱(音の反復)の練習
	7. ぼくは作曲家	4-1 音の聴・唱(音の反復)の練習
	8. ことばの音階	4-1 音の聴・唱(音の反復)の練習
	9. はんたいことば	4-1 音の聴・唱(音の反復)の練習
	10. しりとりにゲーム	4-1 音の聴・唱(音の反復)の練習
	11. 和音のポーズ(その1)	4-6 和音指導
	12. 和音のポーズ(その2)	4-6 和音指導
	13. わらべうたをうたいながら歩きましょう	3-2 自然運動の指導
H 使 っ た リ を 導 く	1. 動物カード	3-6 基礎リズムの指導(2音符カードで指導する)
	2. カードひろい(リズムカードその1)	3-6 基礎リズムの指導(2音符カードで指導する)
	3. 五線カーペット	4-3 音階指導
	4. デイトゲーム(リズムカードその2)	3-6 基礎リズムの指導
	5. 積木(その1)	3-6 基礎リズムの指導
	6. 積木(その2)	3-6 基礎リズムの指導
I ホ ー ド の た め の ニ ー キ ー	1. 音階と和音	4-6 和音指導
	2. ケーデンス(I-V-I)	4-6 和音指導
	3. 伴奏型のいろいろ	4-6 和音指導
	4. ケーデンス(I-IV-I)	4-6 和音指導
	5. ケーデンス(I-IV-V-I)	4-6 和音指導
	6. リズムパターン奏	4-6-10 反復音の練習
	7. G durの練習	該当項目なし
	8. F durの練習	該当項目なし
	9. e mollの練習	該当項目なし
	10. 副三和音	該当項目なし
	11. 慣用和音	該当項目なし
J に い ら る 運 動 な の 歌	1. 四分音符に合う曲	3-7 リズム・パターンの指導
	2. 二分音符に合う曲	3-7 リズム・パターンの指導
	3. 八分音符4つに合う曲	3-7 リズム・パターンの指導
	4. スキップ2つに合う曲	3-7 リズム・パターンの指導
	5. 四分音符、八分音符2つに合う曲	3-7 リズム・パターンの指導
	6. 八分音符2つ、四分音符に合う曲	3-7 リズム・パターンの指導
	7. 四分音符、八分音符4つ、四分音符に合う曲	3-7 リズム・パターンの指導
	8. タンタターイティに合う曲	3-7 リズム・パターンの指導
	9. ティターイティ、ティターイティに合う曲	3-7 リズム・パターンの指導

(板野和彦作成、2024年)

岩崎の教育について考えるとき、「彼が自宅で子どもたちを直接指導していたことが大きな原動力となった。」と考える向きもあるが、彼がリトミック・バイエルを上梓したのは、大学卒業の5年後であり、蓄積された経験によるものと捉えるには無理がある。『リトミック・バイエル』と『リトミック 105』という岩崎の初期の2つの著作は、板野から学んだリトミックの方法論を厳格に順守しながら構成していったところにその特徴があると考えられる。

おわりに

貴重な資料を提供頂いた、リトミック研究センター研究室長、杉本明様、リトミック研究センター事務局各位、元リトミック研究センター事務局長、井上薫様に心より御礼申し上げます。

#### 引用・参考文献

- ・板野晴子『日本におけるリトミックの黎明期』ななみ書房、2016年
- ・板野平『音楽反応の指導法』国立音楽大学出版部、1973年
- ・岩崎光弘、馬淵明彦『こどものバイエル 新しいシステムによるリトミック・バイエル〈上〉、〈中〉、〈下〉』ビクター音楽教室、1973年
- ・岩崎光弘『こどもの音楽リズム遊び Rythmique リトミック 105』ビクター株式会社、1979年
- ・岩崎光弘『リトミックってなあに リズムの良い子に育てよう』ドレミ楽譜出版社、2012年
- ・佐藤学『カリキュラムの批評』世織書房、1996年
- ・ジャック＝ダルクローズ著、山本昌男訳『リズムと音楽と教育』全音楽譜出版社、2003年
- ・リトミック研究センター「岩崎光弘先生お別れの会」(しおり)、リトミック研究センター事務局、2019年
- ・Jaques-Dalcroze, Emile *Méthode Jaques-Dalcroze Exercices de plastique animée* Jobin & Cie, Lausanne, 1917

【エッセイ】

## リトミックと国際交流

池谷 幸（梶山女学園大学附属小学校リトミック講師）

### Dalcroze method and international exchange

Miyuki IKETANI

Thirty years have passed since I first started learning the Dalcroze method. Since then I have to participated in seminars and in various countries conferences. That experience has given me the strength to live a fulfilling life in my own way. I write about my upbringing, how I met Dalcroze method and how I tried to introduce it in Southeast Asia, where Western music is not incorporated in education.

Key Word: リトミック、ICDS、国際大会、国際交流、バンコク、ヤンゴン

#### はじめに

私が大学生の頃に出会った人の中に、リトミックを専攻していた友人がいました。私が、「リトミックって何？」と聞くと、彼女はノートを取り出して「リトミックとは何か」を読んで聞かせてくれました。しかし、その時の私にはイメージすら全く浮かびませんでした。ポカンとした私に「子供ができたなら習わせるといいよ。」と友人は言いました。リトミックとは何なのか？疑問に思った日からざっと40年という歳月が流れました。今回は私なりに「リトミックとは何か？」「リトミックが私に何をもたらしてくれたか？」ということテーマに、日々の実践の中から見えてきたものについて書きたいと思います。

#### 私とリトミックの出会い

私は、2歳から親の仕事の関係でタイのバンコク市で育ちました。父がピアノの音色が好きだったので、幼少の頃からピアノを習っていました。ピアノの先生は、作曲科出身の日本人で有名な曲を私が弾けるようにアレンジして手書きで楽譜にしてくれたり、好きに弾いていいよと即興連弾もよくやってくれたりしていました。中学までは日本人学校に通い、高校ではインターナショナルスクールに通うことにしましたが、ピアノはずっと続けていました。他に娯楽も少なかったのも、ピアノや音楽が大好きになっていきました。

高校生になるとブラスバンドに入ってクラリネットを吹いていましたが、帰国してからは大学オケや市民オケでヴィオラを弾いていました。市民オケには打楽器奏者の友人がいました。その友人は音楽大学でリトミックを専攻していました。私が「リトミックって何？」と聞くと、

友人は電車の中でつり革につかまりながら、小さいノートを取り出してリトミックの説明をしてくれました。その時は、リトミックが何か全く理解できませんでした。そんな私に友人は、「結婚して子供ができたら、リトミックを習わせるといいよ。」と言いました。

その後、私は結婚し、子供に恵まれ、子供に習わせる最初のお稽古事はリトミックにすることに決めていました。チラシを見た瞬間にリトミック教室に入会し、当時3歳の子どもと一緒に楽しく教室に通っていました。リトミックは音楽の基礎能力を育てながら、集中力、反射反応力、積極性、直観力、記憶力などを養うことができると聞いていましたが、実際に子供に習わせてみて徐々にその効果を実感できました。そこで私自身もリトミックを学びたくなり、リトミック研究センターに入会しました。その後5年かけてディプロマA指導資格を取得し、一緒に勉強した仲間と共に、認定教室で幼児を対象にリトミックを24年間指導してきました。

リトミックの指導に従事する一方で、自己研鑽のために国内の講習会及びジュネーブで開催される夏期講習や国際大会、ICDS（国際ダルクローズ学会）にも参加しました。ICDSは第1



【写真1 ICDSでの発表の様子】

回目から第5回目まで参加しましたが、第5回目のポーランド、カトヴィツェで開催された大会では、日本の歌である「ほたる」を使った休符のレッスンを披露するという貴重な経験をすることができました（写真1）。会場にいた外国の先生方に「ほたる」を覚えてもらい、カノンで歌っていただいて日本語の歌が会場に響き渡った時はとても感激しました。

コロナ禍の最中はアメリカのロンジー大学のリトミック講座をリモートで受講していましたが、こうした学習を通じて海外のリトミックにも関心を持つようになりました。

## 東南アジアへ

次は、西洋音楽を学校教育に取り入れていない東南アジアのタイとミャンマー、それぞれの国の幼稚園で2回ずつ、日本で普段やっているリトミックのレッスンを実践する機会が得られたので、その経験と感想について述べます。

### タイ編（2016年12月と2017年9月）

妹とかつて長きに渡り子ども時代を過ごしたバンコクを訪れた時、バンコク郊外にあるジンダーボン幼稚園の経営者に会いました。経営者と妹は英国のバーミンガム大学に留学していた頃の仲間です。私の仕事について興味を持った経営者から「リトミックがどういうものか見せてほしい」と言われ、紹介することになりました。日本とは違い幼稚園には鍵盤楽器がないため、急遽借りて来たキーボードを使ってリトミックのレッスンを始めました（写真2、3）。



【写真2 バンコクの幼稚園】

音楽を使っただけの即時反応は、私のジェスチャーを見たとすぐに理解して活動できていました。音楽が止まったらすぐに止まれます。3種類の音符（4分、8分、2分音符）を聴き分けて動く活動もできました。高低の違いも、ジャンプしたり、床に寝転んだりして、楽しんで活動していました。そのときに改めて再認識したのは、音楽が世界共通語だということでした。

こちらの幼稚園児たちはキーボードが珍しいのか、私が弾いているところをのぞき込むようにして何度も見に来ていました。また、自分でも鍵盤を押してみ

て音が出ることを確認していました。後から聞くと、学校での音楽教育は民族楽器を使って行われているので、ほとんどの子供がキーボードを見たことがないそうです。キーボードを見たことがないということにはとても驚きました。しかし、リトミックが終わるとキーボードはすぐに幼稚園から運び出されてしまい、子供たちは残念そうでした。リトミックの様子を見学していた経営者は「別棟に音楽室を作り、西洋音楽も取り入れた音楽教育を実施して、この幼稚園の特徴にしていきたい」というようなことを話していました。



【写真3 バンコクの幼稚園】

#### ミャンマー編（2018年12月と2019年8月）

ミャンマーと聞いて何を思い浮かべるでしょうか？観光で行ったことがある人も少なく、あまり知られていない国ではないでしょうか？もともと社会主義国家であったことから、長いことビザを取得しないと入国できない国でした。そんなミャンマーにも2018年10月から2020年9月までの2年間だけは、ビザ無しで自由に外国人が出入国できる開かれた時期がありました。それは今から思えば本当に短い期間でした。その後、軍事政権となったのは記憶に新しいところです。



【写真4 ヤンゴンの幼児教室】

ヤンゴンにはミャンマー人と結婚して幼児教室をやっている日本人の友人がいます。彼女とは、マレーシアで行われたリトミックの講習会で出会いました。

彼女から日本で行っているリトミックをミャンマーの子どもたちに実践して欲しいという依頼があり、ヤンゴンに行くことになりました。

「ドレミキッズガーデン」という名前の幼児教室は、ミャンマーの中でも富裕層の子どもたちが通っているところでした（写真4、5）。子どもたちの送り迎えは養育係として雇われた人が行っていたのですが、親子リトミックへの「親」としての参加も養育係が仕事として担っていました。養育係は教育そのものには関心をもっていないようで、預かっている子どもたちが安全に過ごしてさえいればそれで良いという感じがしました。

即時反応は、日本でやるのと同じようにできましたし、絵カードさえあれば動物に変身することもできます。ただ、動物などもその国でポピュラーなものでなければ、見たこともない動物には変身することができません。日本の子供たちにはタイにはよくいる動物の「トクケー」が想像できないのと一緒にです。救急車の絵カードも使いましたが、サイレンの音だけでなく車の色まで日本とは違っていたので理解できなかつたようです。ただ、ピーポー、ピーポーと聞こえたら壁に行くということだけは覚えてくれて、それで何とか乗り切ることができました。



【写真5 ヤンゴンの幼児教室】



【写真6 ヤンゴンの小学校の先生方】

ミャンマーでは、小学校の先生方にリトミックを紹介する機会もありました（写真6、7）。ミャンマーの先生たちは外国人である私に外国の教育を見せてもらうということで、正装である民族衣装の姿で来られたのには、とても恐縮しました（写真6）。民族衣装はタイトなロングスカートなため、急遽動きの少ない活動に変更しました。指導者にも即時反応は常に必要です。先生方は西洋の音楽教育を受けたことが無い

ためか、音の高低の違いが認識できませんでした。そこで、いろいろな音を声に出して紙に書いて、それを組み合わせてボイスパーカッションのようなものをグループで創作する活動をしました。自由に考えて何かを創りあげることが難しいようでしたが、一つ一つ説明して、組み立て方も実際に見せてやってもらいました（写真7）。最後にアンケートがあったのですが、初めての体験で知らないことが多かったというようなことがたくさん書かれていました。自分たちももう少しリトミックを学んでみたいという感想も多く、好評を博したので、翌年から毎年ヤンゴンに行くことにしました。しかし、国の情勢が急に変化して、一時は生きるか死ぬかの状況になってしまったため、リトミックどころではなくなってしまいました。

おわりに

学生の頃、友人に質問した「リトミックって何？」という問いの答えについては、40年を経て自分の中でわかったことがあります。それはリトミックを通じていろいろな国の人、いろいろな年齢の人、いろいろな境遇の人々と交流できるということでした。

世界各国の人が集まる4年に1度開催されるジュネーブの国際大会では、いろいろな国のリトミックを見せてもらうことができました。

南アフリカの Liesl Van Der Merwe 先生 (North-West University) からは、アフリカのある地域で

は、部族間の対立で何事も議決できずにそのままになっていることが多いけれど、リトミックのレッスンを取り入れることで他の人の意見を聞けるようになり、部族間同士の小競り合いがおさまり、念願の用水路を作ることができて農地が耕されたという報告を聞きました。

また、日本で発達支援を軸としたリトミックを提唱している馬杉知佐先生 (比治山短期大学) によれば、障害を持った子供たちは、前庭感覚の発達を促す遊びや活動が必要で、同じ動きをたくさんやらなくてはならないこともあって、その場合に、ただ数を数えながらたくさんやるのは苦痛でも、音楽を使えば何度でも楽しく活動できるということを知りました。

私は市民オケで活動している中で音楽の素晴らしさを日々感じています。そして、音楽のもつ力を使って様々な効果を追求していくリトミックに携わっていることをとても誇らしく思っています。リトミックのおかげで、私の世界は格段に広がりました。世界各国に友人、知人ができました。ダルクローズが考えたメソッドをそれぞれの国で実践している先生方と意見交換できる国際大会も、私の世界を広げてくれる素晴らしいものになっています。

西洋音楽が学校教育に取り入れられていない東南アジアでもリトミックが有効であるということは、自らの実践を通して実感することができました。これからも自分のできる範囲でリトミックを通して国際交流を続けていきたいと思えます。

40年前に友人が一言で「リトミックとは、こうである」と言えなかった意味が今になって分かったような気がします。それを自分なりに理解できるまでに長い歳月がかかりました。リトミック教育の素晴らしさというのは、前述のアフリカのある地域の話でもあったように、リトミックを実践する人が増えれば、お互いに人の意見を聞けるようになるということです。それは、すなわち「リトミックは世界平和の実現に役立つ」ということかもしれません。

「リトミックって何？」と興味を持ってくれる人が一人でも多くなることを願いつつ、国境の壁を越えてリトミックを知ってもらおう活動を、これからも続けていきたいと思っています。



【写真7 ヤンゴンの小学校の先生方】



【執筆者一覧】（掲載順）

板野 和彦 明星大学教授・リトミック研究センター特別顧問

板野 晴子 立正大学教授・リトミック研究センター指導者会員

池谷 幸 梶山女学園大学附属小学校リトミック講師・リトミック研究センター指導者会員

【編集委員一覧】（五十音順）

板野 和彦 明星大学教育学部教授、リトミック研究センター特別顧問

神原 雅之 京都女子大学発達教育学部教授、リトミック研究センター会長

古賀 弘之 名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授、リトミック研究センター本部研究室員

杉本 明 白百合女子大学講師、リトミック研究センター本部研究室 室長

リトミック・オンライン・ジャーナル『音楽と動き』

第3巻第2号通巻5号

Eurhythmics Online Journal “Music and Movement” Vol.5

発行日 2024年2月29日

編集及び発行 特定非営利活動法人リトミック研究センター

所在地 東京都渋谷区千駄ヶ谷1丁目30番8号ダヴィンチ千駄ヶ谷5F

TEL : 03-5786-0095 FAX : 03-5786-0096